

平成24年度第3回墨田区図書館運営協議会会議録

1 日時 平成25年2月10日(日曜日)

午前10時～午前11時30

2 場所 墨田区立あずま図書館

3 出席者

会 長	永田 治樹	(筑波大学名誉教授)
副 会 長	河西 由美子	(玉川大学准教授)
委 員	小暮 周平	(墨田区立菊川小学校長)
委 員	西村 均	(墨田区立鐘淵中学校長)
委 員	金子 キク子	(図書館ボランティア「くさぶえ」)
委 員	永井 敬子	(図書館ボランティア「おはなしポット」)
委 員	小田垣 宏和	(新図書館プロジェクトリーダー)
委 員	小野内 常子	(新図書館プロジェクトリーダー)
委 員	小柳 裕基	(公募区民委員)
委 員	荘司 美幸	(公募区民委員)

4 議事

(1) 平成25年度以降の図書館サービス

(2) 墨田区立ひきふね図書館の運営

(3) その他

5 会議録

議事第1

平成25年度以降の図書館サービス

永田会長 事務局に説明をお願いしたい。

(資料1のとおりあずま図書館次長が説明する)

永田会長 返却館方式について、利用者のメリットは、返されたところですぐに使えるということである。割と多くの図書館で試みられている方法である。地域図書館での引っ張り合いがなく、墨田区で一体化するので、私は良いかと思う。返却館方式にしたことでの変化などのデータはとるのか。

村田館長 一般書で試行してみて、利用者の反応を見ながら、アンケートをとるなどして利用者の反応を見たい。どのようなデータが取れるかについては、良いお知恵

があればいただきたい。

河西委員 返却館方式の効果を見る上で、指標は回転率になるのか。

井東次長 貸出件数も一つの指標になると思う。

河西委員 一部の本しか返却館方式をとらないのであれば、対象になった本の回転率がシステムの前と後でどのくらい違ったのかをみるのが一番はっきりする。

井東次長 中心館で借りてきて近くの図書館で返すと、地域館に本がたまってしまうことは懸念している。そうするとやはり搬送で返さなければならないことになる。

永井委員 ある分野の資料についてはあそこの図書館に行けば自分で見られるというのがあるが、返却館方式を導入するとどこに行けば見つけやすいかがわからなくなってしまう。一律に導入するのは難しいのではないか。

永田会長 そこに行けばある程度資料がそろうという状況を作ること自体が難しくなっているのではないか。

井東次長 地域資料のような、ある程度地域に根ざしてきたものについては、固定にする必要があると考えている。

金子委員 墨田区の人員構成も変わってきていると思う。そういう点では、特定のもの図書館で配慮してもらおうとして、児童図書などの身近なものは一つの試行としてとりあげてみるのも良いかと思う。

永田会長 分野別で資料を各館に分けるという方法はあまりうまくいかない。そこにいけば本が手に入るという状況を作るには、一つの大きな集中した図書館を作っておいて、地域館はその下にあるという形にしないと難しい。

井東次長 以前にも新書を各館で分担して購入していた時期があった。しかし、結局うまくいかなかった。ある種のも物が全くないというのは不評となる。

永田会長 関連している資料はまとめるという考えもある。例えば経済と産業は分けられないなど。慎重な姿勢で検討してもらえば、これまでの方法の課題を解決する方法を見出す試みとして理解できるかと思う。最初の収集の段階ではどうするのか。

井東次長 集中選定はやるが、各館の希望はなるべく生かしていこうと考えている。

永田会長 各館は基本的にはコミュニティをおさえている。ただ利用者が動いて、コミュニティの最初の希望とは違った形になってしまうこともあるので、それを追跡しようということである。

井東次長 新しく小学校に入るお子さんが増えれば、当然そういう児童書等の需要が増える。そこに必要な資料が集まってくる状態を作りたい。高齢の方が多くなってくれば、医療や年金等の資料の需要が出てくる。繰り返し利用する方は、予約が入っていなければすぐに利用していただけるようになる。

永田会長 搬送がなくなるというのも大きなメリットである。もう一つのティーンズサービスはいかがか。

小田垣委員 高校の図書室とも連携しているのか。

井東次長 高校の図書室とはシステムの連携はしていない。都立も状況が変わってきていて、選任の司書がいなくなっている。都立と区立なので、連携はできないが、私立も含めて区内高校への訪問はしている。

永田会長 ティーンズサービスの狙いはどこか。

河西委員 活字離れとか、部活や受験等もあり、一番本を読まなくなる時期である。中学校までは本を読むが、それ以降は大きく落ちる。世界共通の傾向であり、待っているだけだと来ないというのが現状である。シンガポールでは運営自体をティーンズに任せている。デザインもおしゃれなものにしたりとか、かなり力を入れている。ただ単にコーナーを作っただけでは難しい。

村田館長 ティーンズルームで中学生を対象としたビブリオバトルをやったりとか、イベント性を持たせて、楽しかったからまた行ってみよう、とか、友達ができたとか、そういうところまでいければ広まっていくと思う。

河西委員 一番良いのはITを入れることである。その世代が一番いろいろなメディアに接したい世代である。ただ、日本では児童コーナーにしてもティーンズコーナーにしてもほとんど図書とITは切り離されている。図書館に行っても自分たちが見たいメディアはないということで、ターゲットとなる世代のニーズに応えられていない。不適切な利用をおそれて積極的にサービスを提供したがない。

井東次長 小学校ではメディアルーム等で図書とITを結び付けているところもある。ひきふね図書館では、こどもとしょしつには2台のインターネット端末を用意している。一般のほうにも端末を使用できるコーナーを用意している。中学生以上の利用を想定した接続制限は従来から設けている。

永田会長 あとは視聴覚である。

河西委員 また、議論があるところではあるが、漫画、コミックも来てもらうためには有効である。

永井委員 電子図書への対応はどうか。

井東次長 電子図書はいろいろと研究してはいるが、日本の場合方式が定まらない。大手が結合して、国会図書館もやっているが、どの規格になるのかが読めない。外国から入ってきてしまっている状況の中で、対応を模索しているところである。

永井委員 私が申し上げたのは、活字には興味はないけれどパソコンの字にはなじみがある。個人的な意見であるが、本というのは面白いとわかると次々と読みたくなる。しかし、面白いかどうかの判断をする機会がないというのが実感である。取っ掛かりのツールとして電子図書があれば、電子図書から紙の本に興味に移る可能性もある。そこで本の面白さを伝えることができればティーンズの世代にも来てもらえるようになるのではないか。

西村委員 学校図書館で置きたくない本をティーンズコーナーに置いてもらえるとありがたい。例えば、感想文コンクールをするときに、横書の本を読んで書くのを

禁止していた時期もあった。しかし、今は横書のライトノベルのような、とっつきやすいものが多い。そういうもので、図書館において問題がないようなものを置いていただくとありがたいし、利用者も増えていくのではないかと思う。

永田会長 電子図書には多くの問題がある。機器にも問題があるし、コンテンツの入手の仕方にも問題がある。こういう状況というのは、探しにくいという状況であると言える。だからこそ、図書館が補う必要もある。図書館の本もフルに電子図書を収集するというより、たとえばティーンズサービスとして確保しておくなどすればよいし、機器のほうも、利用性の高いものをいくつか置いておく。個人では対応できない部分だけやってみるとするのが良いのではないか。

小柳委員 中・高生たちはこのスペースをどうしたら利用するか、中・高生たちに聞いてみるのが一番良いのではないか。中学校・高校でも図書館部や委員会などがある。例えばそういう子たちにここの運営をしてもらえれば、生のニーズがわかる。ここで議論しているのは、私たちの希望であって、大人の目線からこうあったほうがよいというものである。しかし、実際に利用するのは中・高生であり、彼らに聞くことで一番手っ取り早くニーズを把握できる。その上でフィルターをかけるのがこちらの役目なのではないか。商品開発等でも、まず消費者のニーズを集めるということが重要なことである。そうすれば、運営の実務等も学ぶことができるし、彼らがアナウンスをしてくれる。そういう効果も若干ではあるが期待できる。

小田垣委員 図書部という中・高生版のプロジェクトリーダーを作ろうと企画しているメンバーがいる。

荘司委員 子どもに足を運んでもらうという切り口はいろいろあると思うが、一つは本を読むということが習慣化されている子は読む。親が読んでいると子どもも読むようになる。子どもが本を読まない原因に、親が読んでいないということもあると思う。親子で図書館に来る、小さいうちから親子で図書館に足を運ぶということを習慣つけることも重要である。こどもとしょしつもあるので。いきなり中・高生になって本を読めといっても難しいところがある。まず、親子で図書館にいて、いきなり本を読むではなくてもよい。遊ぶでも良い。そこから本と親しんでもらい、自然に本を読むようになるとういのかと思う。

河西委員 墨田区はブックスタートはやっていると思う。それでお母さんがお子さんと一緒に来て、そのまま図書館利用につながるとうい。ただ、親御さんもお子さんが低学年くらいまではよみきかせをやっているが、高学年あたりになると自分で読めるようになるので、親も離してしまい、親自身も読まなくなってしまう。だから、たとえば親子で参加できる講座とかがあると良い。私学の話ではあるが、玉川学園では、夏休みなどに「親と子の調べ学習講座」というのをやっている。子どもが使うためのメディアセンターに、小学校4年生くらいに親と一緒に来てもらって、夏休みの自由研究になりそうな調べものをし、実際にそれを宿題として出す児童もい

る。そうすると、親もその様子を見ていて、この子は鉄道のことを調べているから鉄道博物館に行こうとか、星のことを調べていけばプラネタリウムに行こうとか。とても評判がよい。そういうこともやれるとよい。あと、先ほどの、子どもたちに実際に運営をしてもらうという話だが、シンガポールでは、中学生のボランティアを単位に入れている。決まった曜日に、図書館を場所として選んだ子が毎週かわるがわる図書館に来るとかがあって、そういうふうに、教育委員会の学校教育部門と連携が取れば、それも一つだと思う。また、職場体験である。静岡市では、ホテルの受付とか図書館のカウンターで中学生が働いていたりする。組織的にやるというのも一つの手だと思う。

村田館長 職場体験は今もやっている。あと図書館見学。それが子どもたちの読書につながるかという効果測定ができない。人形劇とかいろいろとやっているが、それが子どもたちの読書に結びついているかという、わからない。

荘司委員 効果測定ができないと行政はやりづらい。だから、そこは民間がやってみるといい。

河西委員 子ども読書推進計画があると思う。そちらのほうの役割でもあって、地域の働きかけが学校単位で調査をした場合、どのように出るかというのをアンケートでとれると思う。だから連携の仕方の問題だと思う。この地域の子どもたちは学校では読んでいるけれど、実は地域の図書館がよいから地域の図書館でかなり借りて読んでいるとか。そういうことはアンケート調査でも出てくる。

永田会長 ティーンズサービスは読書離れが始まる時期をどう引き戻すかという、大変重要なことなので、積極的に行ってほしい。

議事第2

墨田区立ひきふね図書館の運営について

永田会長 事務局に説明をお願いしたい。

(資料2のとおりあずま図書館次長が説明する)

永井委員 キャレル席というのは何か。

井東次長 学習席のことである。

小田垣委員 これは予約して使用するものなのか。

井東次長 全部で127席あり、うち45席が自由席、82席が予約席となっている。

予約の仕方は、朝一番は利用登録をしている方ならだれでも予約機で席を確保したうえで使用できる。1コマ1時間を2コマまで予約できる。その後さらに使用したい場合、さらに2時間まで予約できるが、これができる方を区内在住・在勤・在学の方に限らせてもらう。来年度中にはウェブ予約もできるようにする予定であるが、システムの開発が遅れている。予約機の数が少ないため、予約のための行列が予想される。

河西委員 ここは電源とネットワークは来ているか。

井東次長 予約席には電源があるが、自由席は電源を供給しない予定である。ネットワークは無線LANを入れている。

永田会長 こういう新しい図書館が評判を呼んでたくさんの利用者が入ってくる。子どもたちも、雰囲気がいから勉強しにくる。勉強をしにくる子どもたちがいっぱいになって、大人が使えないという状況に対して、どのように対応するのか。これまでは図書館は子どもたちを追い出すような対応をしてきている。地域の子子どもたちが安全でそこにいられてそこで勉強しているのをなぜ追い出すようなことになるのか。そのあたりのやわらかい対応をお願いしたい。多少混んでも仕方がないことである。床に座ってもらってでもよい。

井東次長 現時点では社会人、学生という区別は考えていない。港区はティーンズのためだけの図書館がある。しかし、見に行くと、午前中はだれも来ない。こういうことがあるので、午前中は社会人とかへの対応ということになってしまう。それが予約制でどれだけ交替していただけるか。4時間使ったあとになるべくなら交替していただき、学校が終わった学生に使ってもらえるとよいと思っている。

永田会長 これから見に行ってもどれくらいのスペースがあるか拝見したいが、補助椅子でもよいから、とにかく座らせてあげたい。

井東次長 今回の図書館は、基本的にそういうところは設けないという方針できている。それは世間的には全く逆行していることである。しかし、地域的にやむをえない状況がある。これまでの図書館も一定の方に独占されてしまうという状況がある。状況によって増やすことはできる。

永田会長 私がしているのは、特に子どもたちの話である。

井東次長 こどもとしょしつとティーンズルームは問題なく使っていただけている。

永井委員 学習席の予約だが、できるだけシンプルのほうが良い。ただ、そうすると1コマ1時間ということだが、1コマ2時間なら2時間と決めてしまって、それで週に何回までとか、そういうブロックはできないか。そういうことで、独占をふせぐことはできないか。そうすると公平性は保てるのではないか。

井東次長 1コマ1時間としているのは、途中で帰ってしまうことを想定してのことである。1コマ2時間にしてしまうと、1時間で帰られてしまってもその席は空席のまま他の方が使用することができなくなってしまう。なので、単位は1時間として、2時間まで入れられるようにしている。回数制限については、1日の回数制限は設けることは可能である。コマについても検討する。

河西委員 ブースごとにICで管理することはできるとよい。

小野内委員 子ども用の学習スペースが十分確保できないということだったが、この世代に図書館に来てもらわなければいけないという状況の中で、それではいけない

のではないか。

井東次長 目的型読書というのは減っていない。必要に迫られる読書というのは学校では教科書を読まなければいけないし、会社にいけばビジネス書を読まなければいけない。なので、一見矛盾してみえるが、受験をしている子どもたちは絶対に来る。

小野内委員 その子たちを受け入れられる体制を作るのは優先順位が高いのではないか。

井東次長 それは思っているが、物理的な制約がある。

河西委員 図書館の本を読みに来ているのではない、自習室になってしまうと、図書館の本を閲覧しながら調べたい人が本来の使い方ができなくなってしまう。そこで競合する。

永田会長 図書館の使い方としては、図書館にある資料を使うというのが第一義的かもしれないが、図書館のスペースを使うということも大事になってきている。持ち込み資料を利用するケースも多くなってきている。その先駆けが受験生である。図書館がそのような利用も支援しなければならない。図書館は今まで席借りを嫌って追い出していた。でも子どもたちにしても、一人で勉強するよりも、他の子どもたちが勉強しているところで勉強したいものである。

井東次長 あずま図書館でも、夏休みと受験のシーズンは、2階の講習室を自習室として開放しているが、圧倒的に図書館の学習室の利用のほうが多い。その理由は、やはり本に囲まれて勉強したいということのようである。できるかぎり学習席を設けたつもりである。先を争ってきた人だけが有利になるのではなく、ある程度シェアできるように予約制も入れた。数は確かに少ないが、来ていただいた方には満足していただけるようにしたい。

永田会長 ひきふね図書館では順番待ちが非常に大きな問題になるかと思う。その対策をしっかり立てるべきだろう。パリのポンピドゥー・センターというのは非常に人気がある図書館であるが、入るのに半日くらい待たされる。中に入ってしまうえば使いやすいが、待ち行列の解消は懸案事項のようである。

村田館長 受験のシーズンには、ティーンズルームを時間を区切って学習用として使用するようなこともできる。

永田会長 そういう工夫があっても良い。親も図書館で学習していると安心する。子どもたちも学校図書館よりも公共図書館で勉強したいという雰囲気もある。

西村委員 私には高校3年生の子どもがいるが、1月に入ると学校の授業はほとんどなく、受験モードになるが、学校図書館、学校の自習室に1時間かけていくよりも、近くの図書室の自習室で勉強したほうが良いとして、朝9時ころ弁当をもって出かけて行くくらいである。時期的にも、午前中から利用する子もいるので、そういう利用がしやすいよう運営してもよいのかと思う。

永田会長 ひきふね図書館の基本理念とこの図書館事業については、これからもっと

検討を深めていく必要がある。たとえば、ユニバーサルデザインと単に書いてあるが、施設とサービスのユニバーサルデザインという表現にすれば、サービスにもユニバーサルデザインの視点を組み込んでいるということが表現できる。

議事第3

その他（墨田区立ひきふね図書館の広報、パンフレット等について）

永田会長 事務局に説明をお願いしたい。

（村田館長が説明する。）

小柳委員 パンフレットは一般に来館された方に配ることを想定しているのか。

井東次長 新規登録をされた方や希望された方にお配りすることを想定している。

小柳委員 周知という意味では、A4の両面とか、ぱっと見てイメージがつかめるようなものがよい。

井東次長 パンフレットとは別にチラシのようなものは別途作成予定である。

西村委員 墨田区の広報に載せるものとはリンクしないのか。開館のアナウンスはあるが、細かい館の概要とかはそちらで広報して、ティーンズ以下向けのパンフレットと、一般用のパンフレットに特化したものをA4両面で作ってはどうか。

井東次長 3月21日号の区報に1面で館の紹介記事が出る。

村田館長 ケーブルテレビでも、3月24日から30日までの1週間、ひきふね図書館の案内が流れる。また、墨田区の地域情報紙の「Avenue」の3月1日号にも特集として掲載していただく予定である。

永田会長 ネット動画配信サービス等を利用するのも手である。

小柳委員 ホームページでも、館内の様子を動画で流すことができるとイメージがつかみやすい。

永田会長 パンフレット等にこれだけは入れておいたほうが良いという意見はあるか。

荘司委員 こどもとしょしつが別になっているということは入れておいたほうがよい。親が安心していけるようになる。

永田会長 サインはすっきりとさせるべきである。ひきふね図書館の売りは何か。

村田館長 23区初の自動出納書庫である。

永田会長 自動出納書庫は利用者に操作させるのか。

井東次長 自動出納書庫は職員が操作する。

河西委員 オーストラリアのブリズベンの市立図書館では、ベルトコンベアーのところがガラス張りになっていて見られるようになっている。テクノロジーが動いているのがわかる。

永田会長 本日、3点ほど論議すべき点があり、そのうちひきふね図書館の基本理念等については、引続き議論していくことにする。

永田会長 本日の議事は全て終了した。これで平成24年度第3回墨田区図書館運営協議会を閉会する。